名古屋女子大学　紀要 **36**（人・社）123～129　1990

キャサリン・アン・ポーターの「墓」について

石川和代

On Katherine Anne Porter's "The Grave"

Kazuyo ISHIKAWA

I

アメリカ南部出身の女流作家の一人であるKatherine Anne Porterは，あまり多くの作品を書いてはいないが，*Flowering Judas*（1930），*Pale Horse, Pale Rider*（1939），*The Leaning Tower*（1944）の3冊の短篇集をあつめた*The Collected Stories of Katherine Anne Porter*（1965）によって，1966年度のピューリッツァー賞を与えられた作家である．"The Grave"は，*The Leaning Tower*に収められた九つの短篇小説のうちの一つであり，主人公はMirandaという少女である．Mirandaは，Hemingwayの短篇小説のいくつかにNick Adamsが登場するように，Porterの短篇小説のいくつかに登場する．Ray B. Westによれば，Mirandaは，"the mask for the author when the short story is fashioned from autobiographical material and told from the author's point of view"であるから，[1] "The Grave"におけるMirandaの体験も，Porter自身の少女時代の体験に基づいているのかもしれない．Porterの特徴が最も良く示されるのは，"Flowering Judas"に登場する知的な若い娘Lauraや，いくつかの短篇小説に登場するMirandaの場合である．そこで，この小論においては，Mirandaに関する物語である"The Grave"をとりあげ，そこに使われている技巧にも目を向けながら，この短篇小説の主題について考えてみたいと思う．

II

小説の第1節では，30年前に亡くなった祖父の墓が，祖父を愛し続ける祖母によって，2度も移転されることになったいきさつが述べられ，その後，Mirandaと兄のPaulに関する話が始まる．小説の始めにおいては，Mirandaは9才，兄のPaulは12才である．MirandaとPaulは，ウィンチェスター銃を持ってうさぎやハトを狩りに出かけた折に，かって祖父や親せきの者の墓があった場所へやって来て，残っているいくつかの穴の中を探検する．かって一家の墓があった場所は，"a pleasant small neglected garden of tangled rose bushes and ragged cedar trees and cypress, the simple flat stones rising out of uncropped sweet-smelling wild grass."と描写されており，[2] Constance RookeとBruce Wallisはそこにエデンの園のイメージを読みとっている．[3] Mirandaは幼い動物のようにあたりの土をひっかいているうちに，土のかたまりを手のひらにすくいあげる．土は西洋すぎの葉やその他の小さな葉と混ざりあって，"a pleasantly sweet, corrupt smell"（p. 54）がしている．土がぱらぱらと落ちると，彼女はそこに，はしばみの実ほどの大きさの銀のハトを見つける．このハトの胸の部分には，深くて丸い穴があいており，穴の内側は小さな渦巻状に切りこまれている．Paulの言うところによれば，この銀のハ

トは棺のねじの頭である．Paul は，花と葉の入り組んだ模様が刻まれている巾の広い金の指輪を見つける．二人は宝くらべをしようとかけ寄るが，Miranda は銀のハトよりも指輪に，Paul は指輪よりも銀のハトに心を引かれ，二人は宝物を交換するのである．Miranda は女の子であるから，指輪に興味を示すのはごく自然であろうし，Paul が狩が好きであることを考えると，彼が狩の獲物であるハトの形をした物に心を引かれるのも不思議ではないであろう．

この物語に出てくる墓，ハト，指輪，うさぎには，いくつかの象徴的な意味が含まれており，Sister M. Joselyn は，これらのものが持っている象徴的な意味について，"the grave–death, burial, corruption, resurrection, eternity ; the dove–love, faithfulness, wisdom, the soul, martyrdom ; the ring–love, union, marriage, beauty, the cycle of existence, fidelity, permanency ; the rabbits –life, death, birth, blood, prey" と述べている．[4] この意見を参考にするならば，Miranda は "innocence" の象徴であるハトを手放して，"love," "union," "marriage" の象徴である指輪を受け取ることになり，Constance Rooke と Bruce Wallis が，"she is clearly trading her innocence–so far through symbols only–for knowledge of the world and of her function as a woman." と述べているのは的を得ていると言える．[5]

Miranda が指輪を親指にはめると，ぴったり合う．まだ9才の少女の Miranda の手は小さく，指輪は親指にはめると丁度よいのである．黒ん坊が見つけて告げ口するかもしれないから，もう帰ったほうがいいと Miranda が言い出し，二人はその場をあとにする．かって墓があった土地は，今では他人のものとなっているので，二人は侵入者のような気がするのである．二人はうさぎでもハトでも何でもいいからと獲物探しにとりかかる．Paul は好機さえあれば本当に獲物を仕留める射撃の腕を持っているが，Miranda の方は，鳥が自分の目の前で突然バタバタと飛び立つのを見たり，うさぎが自分の足のつま先を飛び越えて行くのを見たりすると，ろくに照準もつけずに引き金を引くといった具合で，どんな的でも的に撃ちあてたためしがない．彼女には狩というものが全くわかっていないのである．彼女は，自分が狩で好きなことは，引き金を引いて音を聞くことだと言う始末である．最初に見つけたハトかうさぎは僕がもらい，二番目のは君のだと言うPaulに向かって，Miranda は，"What about snakes ? ... Can I have the first snake ?" (p. 56) と言う．Darlene Harbour Unrue は，Miranda とエデンの園での Eve とを関連づけて，"Like her archetypal mother, Eve, she indeed will have the 'snake,' the symbol of the way to knowledge of both sexuality and death." と述べているが，[6] この後 Miranda が，生命，誕生，死ということについて知り，自分が女性であることを自覚するきっかけになる出来事に会うことを思うと，Porterがこの会話の中に "snake" をもってきたのは，意図があってのことであろうと考えざるを得ない．

Miranda は，親指にはめた金の指輪がきらきら輝くのを見ているうちに，狩に対する興味を失ってしまう．この時，Miranda は男の子のような服装をしている．紺のオーバーオールに水色のシャツ，雇い人の麦わら帽子，茶色の厚手のサンダル靴といった具合で，兄の Paul も同じいでたちであり，色がちがっているだけである．これは1903年のことで，女は慎ましくあるべきだという原則が田舎では威力を持っていたため，Miranda が男の子のような服装をしていることや，姉の Maria が裸馬にまたがって駆け回ることは，近所で評判になっている．母親のいない一家であり，祖母が亡くなってからは，父親が娘たちを育てていたから，かって祖母をよく知っていた老婆たちは，"Ain't you ashamed of yoself, Missy ? It's aginst the Scriptures to dress like that. Whut yo Pappy thinkin about ?" (p. 57) などと言ったりするが，Mirandaは，服の着心地が良いために，今の服で満足している．彼女は今まで厳しい倹約の中

で育てられ，浪費は下品なことであり罪でもあると教えられ，それを疑ったことなどない．

しかし，今度は，親指で輝いている金の指輪をながめているうちに，Mirandaは男の子のような服装がいやになり，女らしい服装を望み始める：

> Now the ring, shining with the serene purity of fine gold on her rather grubby thumb, turned her feelings against her overalls and sockless feet, toes sticking through the thick brown leather straps. She wanted to go back to the farmhouse, take a good cold bath, dust herself with plenty of Maria's violet talcum powder—provided Maria was not present to object, of course—put on the thinnest, most becoming dress she owned, with a big sash, and sit in a wicker chair under the trees.... These things were not all she wanted, of course ; she had vague stirrings of desire for luxury and a grand way of living which could not take precise form in her imagination but were founded on family legend of past wealth and leisure. (p. 58)

今まで男の子のような服装に何の抵抗も感じなかったMirandaが，"love,""union,""marriage," "beauty" などの象徴である指輪をながめているうちに，狩に対する興味を失い，さらに，男の子のような服装がいやになり，極めて女性らしいものを求め始めるのであるから，ここで，Potrerは巧みに象徴を使っていると言える．Mirandaはこの1節に描かれているようなことをすぐにもやりたいと思い，すぐに自分だけ家に帰ろうかと思うが，兄のPaulなら彼女に対してそんなことはしないだろうと考え，思いとどまる．そんな時，うさぎがとび出し，Paulは一発でそのうさぎを仕留める．

ここから，物語の中心をなす最も重要な部分へとはいっていく．MirandaがPaulの傍へ歩み寄ると，彼はうさぎの傷を調べている．Paulはまるで手袋でもはずすみたいに，猟刀を使って見事にうさぎの皮をはぎ，Mirandaは感心してそれをながめる．"The flayed flesh emerged dark, scarlet, sleek, firm" (p. 59) し，彼女は，親指と人差し指とで，"the long fine muscles with the silvery flat strips binding them to the joints" (p. 59) にふれてみる．その時，Paulはうさぎの奇妙にふくれた腹を持ち上げ，驚いたように声をひそめて，"Look, ...It was going to have young ones." (p. 59) と言うのである．

非常に注意深く，肋骨から両脇腹にかけて，Paulが薄い肉を切り裂くと，深紅色の袋，すなわち子宮があらわれる．Paulがその袋をひきあけると，そこには小さなうさぎが，一匹ずつ薄い深紅色の膜に包まれて，ひとかたまりになって入っており，彼がその膜をひきはがすと，"there they were, dark gray, their sleek wet down lying in minute even ripples, like a baby's head just washed, their unbelievably small delicate ears folded close, their little blind faces almost featureless." (p. 59) なのである．Mirandaは，声をひそめて，"Oh, I want to *see*," とささやき，じっとながめるが，興奮したり，怖がったりはしない．これは，彼女が狩で殺された動物を見ることに慣れているからである．Mirandaはその一匹に注意深くさわりながら，"Ah, there's blood running over them." (p. 60) とささやき，"tremble without knowing why" (p. 60) し始める．それでも彼女は，"most deeply to see and to know" (p. 60) することを望む．だが，見てしまったとたんに，彼女はまるで "she had known all along" (p. 60) であるかのように感じる．そして，"The very memory of former ignorance faded, she had always known just this." (p. 60) なのである．Mirandaは，兄のPaulは以前から何でも知っているような口を聞くのだ

から，今度のようなことも前にすべて見たことがあるのかもしれないと考える．また，兄はこれまでひとことも彼女に話してくれなかったけれども，今は兄の知っていることの，少なくとも一部は自分も知ったのだと彼女は思う．彼女は，“understood a little of the secret, formless intuitions in her own mind and body, which had been clearing up, taking form, so gradually and so steadily she had not realized that she was learning what she had to know.”（p. 60）したのである．Miranda は9才の少女ではあるが，女性であるが故に，うさぎの子宮の中に入っている小さなうさぎたちを見た時に，「ああ，血が流れているわ．」と言って，彼女の体がぶるぶる震え，妊娠や出産といった事柄を最初から知っていたような気がするのであろう．また，「彼女の心と身体の中にある，ひそかな形をなさない直観」とは，自分もまた女性であるが故に，将来，妊娠及び出産という犠牲を払わねばならない運命にあるのだという，ぼんやりとした直観と言えるであろう．

Paulが，まるで“talking about something forbidden”（p. 60）であるかのように，注意深く，最後の言葉のところで声をおとして，“They were just about ready to be born.”（p. 60）と言うと，Miranda は，“I know....like kittens. I know, like babies.”（p. 60）と答える．そして彼女は“quietly and terribly agitated”（p. 60）して，その血にぬれた小さなうさぎたちのかたまりを見下ろしながら，“I don't want the skin,....I won't have it.”（p. 60）と言う．以前は自分の人形がうさぎの毛皮にくるまっているのを見るのが好きであった Miranda であったのだが，今ではもう毛皮はいらないと思うのである．Paul は，“buried the young rabbits again in her mother's body”（p. 60）し，それを皮で包み，セージの茂みに運びこんで，どこかへ隠してしまう．ここで“bury”という動詞が使われているのは，母親うさぎの体の中に幼いうさぎたちが「埋葬される」という，墓のイメージを持たせるためであったと思われる．ここにおいて，墓が子宮であることは，墓が埋葬される場所であるのみでなく，生命を生み出す場所でもあるとの意味がこめられているのではないであろうか．また，死んだ母親うさぎの子宮の中に，これから生まれようとしていた幼いうさぎを見るという場面の中で，生と死が不可思議に結びついていると考えるならば，John Edward Hardy が，“the story acknowledges the mysterious interdependence of life and death.”と述べるのは納得できることであると思われる．[7] この後，Paul はまるで“he were taking her into an important secret on equal terms”（p. 61）であるかのように，彼としては全く珍しい“a confidential tone”（p. 61）で，次のように言う：

> “Listen now. Now you listen to me, and don't ever forget. Don't you ever tell a living soul that you saw this. Don't tell a soul. Don't tell Dad because I'll get into trouble. He'll say I'm leading you into things you ought not to do. He's always saying that. So now don't you go and forget and blab out sometime the way you're always doing....Now, that's a secret. Don't you tell.”（p. 61）

Dale Kramer は，この Paul の言葉について，“This statement, in addition to the references to Miranda's quiet and terrible agitation, makes ti obvious that even if Miranda previously had known 'intellectually' about babies, this incident is her introduction to the truth about reproduction.”と述べているが，[8] Miranda が母親うさぎの子宮の中を見ることは，彼女が生殖というものを知るきっかけになったであろうし，「おとうさんにも言っちゃいけない，僕が困るからね．おとうさんは，僕がお前をやっちゃいけないことに引っぱりこんでいるって言うよ．」という

Paul の言葉は，そのことを暗示しているとも言えるのである．また，この出来事は，生まれようとしている生命を殺すという罪を伴うものでもあり，Miranda が死という事柄に目を向けるきっかけにもなったであろうと考えるならば，Jack Krause DeMouy の，"Miranda's first sexual knowledge is not only forbidden and shocking, but carries with it guilt and danger of expulsion as well as the sure knowledge of her own mortality." という意見も，適切なものではないかと思われるのである．[9]

「誰にもしゃべっちゃいけない．」と Paul に言われた Miranda は，決して話さないし，話したいという気持すら起こらない．数日間，この厄介な出来事の一部始終を考えると，Miranda はわけのわからないみじめな気持でみたされるのである．それから，その思い出は，静かに彼女の心の中に沈み，その上に，数えきれぬほどの印象が蓄積され，20年の歳月が過ぎていく．そんなある日，見知らぬ土地で，Miranda は次のようなことを体験する：

> One day she was picking her path among the puddles and crushed refuse of a market street in a strange city of a strange country, when without warning, plain and clear in its true colors as if she looked through a frame upon a scene that had not stirred nor changed since the moment it happened, the episode of that far-off day leaped from its burial place before her mind's eye, She was so reasonlessly horrified she halted suddenly staring, the scene before her eyes dimmed by the vision back of them. (p. 61)

Miranda の心の中に沈んでいた，20年前の出来事についての思い出が，突然あざやかに思い出されるのであるが，ここで，"its burial place before her mind's eye" という言葉が使われているのは，やはり墓のイメージを持たせるためであると思われる．Mirandaの心は，20年前の出来事の思い出が埋葬されていた墓なのであり，そこは埋葬場所であると同時に，思い出がよみがえる場所でもあると言える．うさぎの子宮の場合と同じように，ここでも，墓には二つの意味がこめられているのである．

ところで，Miranda が20年前の出来事を突然思い出すきっかけになったのは，彼女がこの見知らぬ土地の市場街で，小鳥，小さなひよ子，小羊，小豚などの形をした砂糖菓子にまじって，小さなうさぎの形をした砂糖菓子を見たこと，そして，その市場街の臭いが，"the mingled sweetness and corruption she had smelled that other day in the empty cemetery at home" (p. 62) に似ていたことである．彼女は故郷の空になった墓で嗅いだのと同じような臭いを嗅ぎ，あれは自分と兄が空になった墓の中で宝物を見つけた日であったと思うのだが，そう思ったとたんに，彼女が "reasonlessly horrified" して立ち止まり，じっと見つめた，不気味な映像は消え，彼女の眼には12才の兄 Paul の姿が浮かぶ：

> Instantly upon this thought the dreadful vision faded, and she saw clearly her brother, whose childhood face she had forgotten, standing again in the blazing sunshine, again twelve years old, a pleased sober smile in his eyes, turning the silver dove over and over in his hands. (p. 62)

この最後の１節について，Vereen M. Bellは，" .... it is Paul that passage is about, and not the dove ; and if we must use abstract labels, certainly this is more a vision of Childhood, of Inno-

cence and Wonder, than it is of Resurrection." と述べている.[10] 空になった墓の中で銀のハトを見つけた時には "innocent" な子供であった Miranda が，死んだ母親うさぎの子宮の中に，まだ生まれていない，血まみれになった幼いうさぎたちのかたまりを見ることによって，生命，誕生，死といったことを知ると同時に，彼女自身が女性であり，死すべきものであることを意識しはじめ，この出来事は何か怖い事として，彼女の心の中に沈んでいき，20年後，大人の女性になった彼女の心の中に，怖い事としてよみがえるのだが，空になった墓の中で宝物を見つけた日であったと思ったとたんに，Miranda は，あの出来事以前の "innocent" な子供であった時のことを思い起こし，心が安らぐのであろうか．Constance Rooke と Bruce Wallis は，物語全体を "the loss of innocence and the assumption of knowledge in the Garden of Eden" と考え，最後の場面で Paul が手に持っている銀のハトの胸の穴に刻まれた渦巻は連続する循環のイメージであり，"brevity of death and the inevitability of new life" を暗示しているとして，この1節の中に，"redemption and resurrection" の意味を読みとっている.[11]

Ⅲ

振り返って考えてみると，この物語は，"innocent" な少女であった Miranda が，ある出来事を通して，生命，誕生，死といったことについて知ることになり，自分もまた女性として，血の犠牲を払い，生命を生み出さねばならない宿命を背負っていることを，自覚しはじめるという物語である．豊かな象徴が使われ，Catholicism を背景に持つ，アメリカ南部出身の作家らしく，そこには宗教的なイメージも含まれているが，物語の中心をなしているのは，アメリカ文学によく描かれる "initiation" の主題であると言える．その意味で，Cleanth Brooks が，最も適切に，この物語をとらえていると思えてならないのである：

> Obviously the story is about growing up and going through a kind of initiaiton into the mysteries of adult life. It is thus the story of the discovery of truth. Miranda learns about birth and her own destiny as a woman ; she learns these things suddenly, unexpectedly, in circumstances that connect birth with death. Extending this comment a little further, one might say that the story is about the paradoxical nature of truth : truth wears a double face—it is not simple but complex. The secret of birth is revealed in the place of death and through a kind of bloody sacrifice. If there is beauty in the discovery, there is also awe and even terror.[12]

註

1 Ray B. West, Jr., "Katherine Anne Porter and 'Historic Memory'," in *Southern Renascence : The Literature of the Modern Sovth*, ed. Louis D. Rubin, Jr. and Robert D. Jacobs (Baltimore : The Johns Hopkins Press, 1953), p. 278.

2 Katherine Anne Porter, *The Old Order : Stories of the South from Flowering Judas, Pale Horse, Pale Rider and The Leaning Tower* (San Diego ; New York ; London : Harcourt Brace Jovanovich, 1958), p. 53. 以後，テキストからの引用はすべてこの版によるものとし，引用箇所の後の括弧内にその頁を記す.

3 Constance Rooke and Bruce Wallis, "Myth and Epiphany in Porter's 'The Grave'," in *Katherine Anne Porter*, ed. Harold Bloom (New York : Chelsea House, 1986), p. 62.

4 Sister M. Joselyn, " 'The Grave' as Lyrical Short Story," *Studies in Short Fiction*, 1 (1964), 219—220.

5 Constance Rooke and Bruce Wallis, "Myth and Epiphany in Porter's 'The Grave'," p. 63.

[6] Darlene Harbour Unrue, *Truth and Vision in Katherine Anne Porter's Fiction* (Athens : The University of Georgia Press, 1985), p. 52.

[7] John Edward Hardy, *Katherine Anne Porter* (New York : Frederick Ungar, 1973), p. 24.

[8] Dale Kramer, "Notes on Lyricism and Symbols in 'The Grave'," *Studies in Short Fiction*, 2 (1965), 334.

[9] Jane Krause DeMouy, *Katherine Anne Porter's Women : The Eye of Her Fiction* (Austin : University of Texas Press, 1983), p. 140.

[10] Vereen M. Bell, "'The Grave' Revisited," *Studies in Short Fiction*, 3 (1965), 44.

[11] Constance Rooke and Bruce Wallis, "Myth and Epiphany in Porter's 'The Grave'," p. 68.

[12] Cleanth Brooks, "On 'The Grave'," *Yale Review*, 55 (1966), 277－278